

日琉祖語四声仮説： 最少の声調と最少の音変化でアクセント体系の多様性を説明するために

五十嵐陽介
(国立国語研究所)

要旨

日琉祖語のアクセント体系を再建する従来の研究には、1) 祖語に再建される類が多すぎる、2) 同一の連鎖推移が並行的に何回も生じたと仮定するという問題がある。本研究は、日琉祖語は4種類の基底声調を持つとする「日琉祖語四声仮説」を提案する。基底声調はH類、HL類、L類、LH類の4種であり、声調付与の領域は語である。各基底声調を構成するトーン(H, HL, L, LH)の連結する音節は基底声調と語形成を参照する音韻規則によって決定されるので、日琉祖語は基底レベルで「位置の対立」を欠く「語声調」言語である。日琉諸語の比較からは4を大幅に超える類が再建されてきた。本仮説はそれらの類を、複合形式に適用される音韻規則により派生された表層型に由来するとみなし、類の増加は、音韻規則の生産性の消失および複合形式の語彙化による *tonogenesis* の結果と主張する。本研究はさらに、「日琉祖語四声仮説」が、先行研究と比較して大幅に少ない音変化で、現代の日琉諸語のアクセント体系の多様性を説明することができることを示す。

1. はじめに

1.1 目的

- 日琉祖語が4種類の基底声調を持つとする「日琉祖語四声仮説」を提案する。
- 最少の声調数を仮定するこの仮説が、最少の音変化によって、現代諸言語におけるアクセント体系の多様性を説明できることを示す。

1.2 従来の枠組みの問題点

- 日琉祖語に再建されるアクセント類の数が多すぎる(7~12)。
- 類似の体系が地理的に不連続な形で分布する事実を説明するために、同一の方向性を持った連鎖推移が並行的に生じたと仮定せざるを得ない。

1.3 問題点 1: 多すぎるアクセント類

- 金田一(1975): 1音節 3類 2音節 5類 3音節 6-7類。
- 上野(2006): 1音節 5類 2音節 8類 3音節 12類。

1.4 問題点 2: 多すぎる音変化

- 金田一 (1954) は同一の連鎖推移が地理的に不連続の言語に並行的に生じたとする。

2.3 類 (「山」「犬」等)	*L.L > *H.L > L.H=L
2.4 類 (「海」「針」等)	*L.H > *L.L > H.L
3.4 類 (「頭」「男」等)	*L.L.L > *H.H.L > *L.H.H=L
3.5 類 (「心」「枕」等)	*L.L.H > *H.L.H > *H.L.L > L.H.L
3.7 類 (「鰻」「左」等)	*L.H.H > *L.L.H > *L.L.L > H.L.L
- 「12 世紀の院政時代のアクセントが祖形で、それから東京式のアクセントができたというのだが、同じ変化が奈良県南部の十津川にも、中国地方にも、四国の南西部にも別々に起こった、と言わなければならないわけで、それだけでも無理だと感ぜられる」(服部 1976/ 2018: 69)

1.5 「日琉祖語四声仮説」の概要

- 基底声調は H 類、HL 類、L 類、LH 類の 4 種類である。
- 基底声調付与の領域は語である。
- 4 種の類を構成するトーンの間を連結する音節は、基底声調と語形成とを参照する音韻規則(第 4.3 節)により決定される。
- 日琉祖語は基底レベルでは「位置の対立」のない「語声調言語」(早田 1999) である。
- 語末音節にデフォルトの M トーンが連結する。

	H 類	HL 類	L 類	LH 類
1 音節語	(1.1 対応) HM	(1.2 対応) HLM	(1.3 対応) LM	(1.3b 対応) LHM
2 音節語	(2.1 対応) H.M	(2.2 対応) HL.M	(2.3 対応) L.M	(2.4/5 対応) LH.M
3 音節語	(3.1 対応) H.∅.M	-	(3.4 対応) L.∅.M	(3.6/7 対応) LH.∅.M

- 複合形式の一部は音韻規則によって派生される二次的な表層型を持つ。
- 複合形式の持つ二次的な表層型に音変化が生じることにより、音韻規則が生産性を失い、表層型に由来する型が他の類と対立するようになる(「後期日琉祖語」における tonogenesis)。

➤ HL² 類 (3.2) と LH² 類 (3.5) が発生する。

	HL ² 類	LH ² 類
3 音節語	(3.2 対応) H.HL.M	(3.5 対応) L.LH.M

1.6 現時点での「日琉祖語四声仮説」の限界

- 2.4 と 2.5 の区別、3.6 と 3.7 の区別の由来に十分な説明が与えられない。
 - これらの区別は日琉祖語に存在せず、甲種アクセント(第3.1節参照)を持つ諸言語の共通祖語における改新とみなせる見通しがある(五十嵐(2016)参照; また2.4 と 2.5 の区別が日琉祖語に遡らないとする説については早田(2017, 8章)参照)¹。
- 所謂 3.6a と 3.6b の区別、3.7a と 3.7b の区別(平子2017)を巡る問題も射程外とする。
- 助詞のアクセントは考察外とするのでそれにかかる諸問題は解決されない。

¹ 早田(2017)は類聚名義抄に記された平安時代後期京都語においては、2.4 と 2.5 の区別はまだ生じていなかったとしている。早田は2.4 と 2.5 の基底表示は同一であり、その音声実現は L.H と L.HL の間で揺れていたとする。早田(2017: 155-159)の記述からは、両者が一種の条件異音とみなされていることがうかがえる。その条件は完全には特定されていないが、語末音節の頭子音の共鳴音性と有声性がその条件に含まれる。早田は「基底形が同じでも音声形の違いが次第に固定化し、ついに基底形が再組織化された」(2017: 157)と述べている。「基底形の再組織化」という表現で意味されるものは、単一の基底表示から音韻規則によって派生される2つの異なる表層表示が、異なる2つの異なる基底表示から派生された表層表示と再分析される通時的変化のことでありと思われる。特定の条件に基づいて派生した異なる表層表示のそれぞれが、別々の基底表示へと通時的に変化したとするためには、その条件が消失する通時的変化を再建する必要がある。しかしそれが十分に検討されていないように思われる。私は問題の条件を消失させた要因を、五十嵐(2016)で指摘した「群化」(上野2002)、すなわち同一の意味領域を共有する語が同一の型を持つようになる類推変化にみる。五十嵐(2016)で指摘したように、色彩、季節、動物を意味する2.4/5の語はすべて2.5に属し、「群化」が生じたことが示唆される。日琉祖語四声仮説では、2.4 と 2.5 の区別が生じる直前の体系(甲種祖語の体系)の2.4/5に L.HM、すなわち語末音節に軽佻な下降を持つ型が再建される(第3.2節)。特定の条件を備えた語はより下降が顕著に実現されたと仮定しよう。すなわち下降が顕著な条件異音とそうでない条件異音が存在したと仮定しよう。早田(2017)と同様にその条件は完全に特定できないが、語形成(*woke* 2.5「桶」、*nabe* 2.5「鍋」、*mafe* 2.5「前」、*mado* 2.5「窓」等は明らかに複合語である(五十嵐2022b参照)や二重母音由来の語末母音(*kuro* 2.5「黒」(<?*kurau)、*siro* 2.5「白」(<?*sirau)、*awi* 2.5「藍」(<*awoi (Pellard 2013))等)などがその条件に含まれるだろう。他にも2.4 と 2.5 の間には顕著な分節音上の偏りがある(五十嵐2016)。本来その条件を備えていない2.4/5に属する語が、群化によって下降の顕著な異音で実現されるようになれば、異音の条件は消失し、新たな対立が生まれることになる。色彩語 *awo* 2.5「青」はその一例であろう。色彩語「黒」と「白」は問題の条件を備えているが *awo*「青」(<*awo (Pellard 2013))はそうではないので、この語は群化によって顕著な下降を持つ異音で実現されるようになったと考えることができる。加えて、*aka* 2.5「赤」は語根を共有する動詞・形容詞が低起式(L類、LH類)でなく高起式(H類)であることから、この色彩語は元来H類(2.1/2)であったとみなすことができる。この語は群化によってLH類(2.4/5)に変化したのち(西南部九州諸語はこの改新を共有していない)、甲種祖語においてさらに他の色彩語とともに顕著な下降を持つ異音で実現されるようになったとみなすことができる。問題の条件を備えていない *awo* や *aka* が顕著な下降を持つことによって、元来条件異音であった顕著な下降を持つ実現形が、他と対立するようになり、新しい類すなわち2.5が発生する。たしかに、*ine* 2.4 (<*inai)「稲」、*tane* 2.4 (<*tanai)「種」、*nafe* 2.4 (<*napai)「苗」等は、二重母音由来の語末母音を持つにも関わらず、2.5に属していないという問題が残る。しかし、これらは「農作物」という意味領域を共有しており、2.4に属する *mugi* 2.4「麦」、*afa* 2.4「粟」等への群化を想定することもできる。3.6 と 3.7 の区別の背景にも同様の機序を想定できるだろう。日琉語四声仮説では、甲種祖語の3.6/7にも軽佻な下降を伴う L.H.HM が再建されるので、語末音節の下降がより顕著な異音とそうでない異音の存在を仮定し、その異音は分節音、語形成等によって条件づけられていたと仮定できる可能性がある。3.6に動植物名が偏在している事実は、3.6/7に属する語に群化が生じたことを示唆する。

2. 日琉祖語四声仮説による日琉祖語アクセント体系の再建

2.1 平安後期京都語の体系(名義抄式)の再解釈

- 類聚名義抄等の声点資料と現代諸言語の比較に基づいて再建される平安後期京都語
 - 1 音節
 - 1.1 類 /H/ *fā* 「端」、*fō* 「帆」、*ká* 「蚊」、*kó* 「子」、*tó* 「戸」、*wó* 「緒」
 - 1.2 類 /HL/ *fā* 「葉」、*fī* 「日」、*jā* 「矢」、*nā* 「名」、*nē* 「値」、*ū* 「鶉」
 - 1.3 類 /L/ *fō* 「穂」、*kà* 「鹿」、*kò* 「籠」、*tò* 「砥」、*nà* 「菜」、*wò* 「尾」
 - 1.3b 類 /LH/ *fā* 「齒」、*fī* 「檜」、*jā* 「屋」、*mě* 「女」、*sū* 「巢」、*wō* 「芋」
 - 2 音節
 - 2.1 類 /H.H/ *sásá* 「笹」、*fási* 「端」、*fáná* 「鼻」、*úsi* 「牛」、*táká* 「鷹」
 - 2.2 類 /H.L/ *kátá* 「形」、*fási* 「橋」、*káfà* 「川」、*kúrà* 「鞍」、*útà* 「歌」
 - 2.3 類 /L.L/ *kàtá* 「片」、*fàdì* 「恥」、*fànà* 「花」、*kùrà* 「蔵」、*jàmà* 「山」
 - 2.4/5 類 /L.H/ *kàtá* 「肩」、*fási* 「箸」、*áfá* 「粟」、*itá* 「板」、*kámá* 「鎌」
 - 3 音節
 - 3.1 類 /H.H.H/ *ikári* 「錨」、*sákáná* 「魚」
 - 3.2 類 /H.H.L/ *fútàri* 「二人」、*músúmè* 「娘」
 - 3.4 類 /L.L.L/ *fàsàmi* 「鋏」、*kàtànà* 「刀」、
 - 3.5 類 /L.L.H/ *sùgàtá* 「姿」、*àsàfī* 「朝日」
 - 3.6/7 類 /L.H.H/ *fidári* 「左」、*tàkásá* 「高さ」(以上 3.6)
 - /L.H.L/ *kùsùri* 「菓」、*fitótù* 「一つ」(以上 3.7)
- (1) のような特徴がある。
 - (1) a. 1 音節語に 4 種類の対立する型がある。

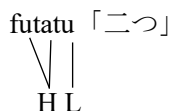
<i>fā</i> 「端」	<i>fā</i> 「葉」	<i>fā</i> 「齒」
	<i>nā</i> 「名」	<i>nà</i> 「菜」
		<i>sù</i> 「酢」
		<i>sū</i> 「巢」
<i>wó</i> 「緒」		<i>wò</i> 「尾」
		<i>wō</i> 「芋」
 - b. 2 音節語にも 4 種類の対立する型がある。

<i>kátá-</i> 「固い」	<i>kátá</i> 「形」	<i>kàtá</i> 「片」	<i>kátá</i> 「肩」
-------------------	-----------------	-----------------	-----------------
 - c. 1 音節・2 音節語の型は H (高)、HL (下降)、L (低)、LH (上昇) で共通する。
 - d. 3 音節語には 4 種を超える型がある。
 - e. 3 音節語の型のうち 3 つは、1 音節・2 音節語の型と同じ H (高)、L (低)、LH (上昇) である。
- (1) に基づき、(2) のように平安時代後期京都語の体系を再解釈する。
 - (2) a. 平安時代後期京都語の以下の型を基底レベルで同一とみなす (1ce)
 - H (1.1) と H.H (2.1) と H.H.H (3.1)
 - HL (1.2) と H.L (2.2)
 - L (1.3) と L.L (2.3) と L.L.L (3.4)
 - LH (1.3b) と L.H (2.4/5) と L.H.H~L.H.L (3.6/7)

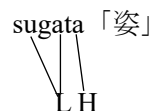
H 類	HL 類	L 類	LH 類
(1.1) ka 「蚊」 H	(1.2) na 「名」 / \ H L	(1.3) na 「菜」 L	(1.3b) fa 「齒」 / \ L H
(2.1) taka 「鷹」 / \ H	(2.2) kafa 「川」 / \ H L	(2.3) jama 「山」 / \ L	(2.4/5) kama 「鎌」 / \ L H
(3.1) ikari 「錨」 / \ H		(3.4) fasami 「鋏」 / \ L	(3.6/7) fidari 「左」 / \ L H

- b. 3音節語に認められる型 (1d) のうち (2a) に含まれない H.H.L (3.2) は HL 類と素性を共有し、L.L.H (3.5) は LH 類と素性を共有しているが、トーンの付与される音節の位置によって基底レベルで対立しているとみなす。

**HL⁻²類
(3.2)**



**LH⁻²類
(3.5)**



- (1-2) に基づき、日琉祖語の体系を再建する。
- (3)
- a. 平安時代後期京都語の1音節単純語に4種の型があることと、型の分裂を生じさせた条件を特定できないことから、日琉祖語には少なくとも4種類の類を再建せねばならない。
 - b. 日琉祖語の4種類の類(基底声調)は、平安時代後期京都語の1~2音節語に等しく認められる、H(高)、HL(下降)、L(低)、LH(上昇)とみなす。
 - c. HL⁻²類(3.2)とLH⁻²類(3.5)について仮定せざるを得ない位置の対立は、日琉祖語には存在せず、特定の基底声調と語形成を持つ複合形式に適用される音韻規則によって二次的に派生された表層型に由来するとみなす。

2.2 日琉祖語四声仮説における日琉祖語の体系の再建

- H類、HL類、L類、LH類の4種の基底声調を再建。
- 基底声調は、最初のトーンの高低を表す素性[±H] (高起性)、トーンが1つか2つかを表す素性[±A] (起伏性) によって自然音類をなす。

		[±H], 高起性	[±A], 起伏性
H類	高起平板	+	-
HL類	高起起伏	+	+
L類	低起平板	-	-
LH類	低起起伏	-	+

- 基底声調を構成するトーンは語(形態素)の初頭音節に連結する。

H類	HL類	L類	LH類
(1.1) *ká 「蚊」 H	(1.2) *nâ 「名」 / \ H L	(1.3) *nà 「菜」 L	(1.3b) *pǎ 「齒」 / \ L H
(2.1) *táka 「鷹」 H	(2.2) *kâpa 「川」 / \ H L	(2.3) *jàma 「山」 L	(2.4/5) *kǎma 「鎌」 / \ L H
(3.1) *íkari 「錨」 H		(3.4) *pàsami 「鋏」 L	(3.6/7) *pídari 「左」 / \ L H

- 語末には default の M トーンが連結する。

➤ ピッチが中域に戻る働きが音韻化したもの。

	H 類 (1.1)	HL 類 (1.2)	L 類 (1.3)	LH 類 (1.3b)
	*ká 「蚊」 H M	*ná 「名」 H L M	*ná 「菜」 L M	*pǎ 「歯」 L H M
shorthand	/HM/	/HLM/	/LM/	/LHM/
	(2.1)	(2.2)	(2.3)	(2.4/5)
	*táka 「鷹」 H M	*kápa 「川」 H L M	*jàma 「山」 L M	*kǎma 「鎌」 L H M
shorthand	/H.M/	/HL.M/	/L.M/	/LH.M/
	(3.1)		(3.4)	(3.6/7)
	*íkari 「錨」 H M		*pàsami 「鋏」 L M	*pídari 「左」 L H M
shorthand	/H.Ø.M/		/L.Ø.M/	/LH.Ø.M/

- M トーン連結を仮定する利点

- H 類 (1.1・2.1・3.1) に「下降式」を再建する枠組み (上野 1988, 2006) が説明する音変化を説明できる。
 - ◇ H 類は表層で高域から中域への緩やかな下降を伴っているので、一部の諸言語において H 類が急激な下降を持つに至る通時的変化が説明できる。
- HL 類 (1.2・2.2・3.2) が、H 類 (1.1・2.1・3.1) と L 類 (1.3・2.3・3.4) の双方と合流しやすい事実 (平子 2020; 児玉 2020 参照) を説明できる (第 3.6 節参照)。
 - ◇ H 類と HL 類は下降を有する点で共通する。
 - ◇ HL 類と L 類は上昇を有する点で共通する。
- 乙種アクセント (第 3.1 節参照) 諸語のアクセント核の発生が説明できる。
 - ◇ H 類を除いてすべての類が持つ上昇がアクセント核と再分析される (第 3.6 節参照)。
- 甲種アクセント (第 3.1 節参照) 諸語における 2.4 と 2.5 の「分裂」、3.6 と 3.7 の「分裂」を説明できる可能性がある (本稿の射程外)。
 - ◇ 2 音節以上の LH 類 (2.4/5・3.6/7) は基底声調の起因する上昇の後に緩やかな下降を伴う。下降が顕著な条件異音とそうでない条件異音とが、後の分裂を生じた可能性がある。

- 複合形式の場合、語形成と構成要素の基底声調とを参照する音韻規則(第4章参照)によってトーンとそれが付与される音節(いずれも形態素初頭音節)が決定される。
 - 複合形式の一部は単純形式と同じ表層型(H型、L型)となるが、一部は単純形式に現れない二次的な表層型となる。
 - 二次的な表層型は、複合形式の語形成とその構成要素の基底声調から予測可能なので、基底レベルでは対立しない。

	H 型		L 型	
	(3.1)		(3.4)	
	*pána+di 「鼻血」		*tà+mətə 「袂」	
shorthand	/H.Ø.M/		/L.Ø.M/	
	HL⁻² 型	HL⁻¹ 型	LH⁻² 型	LH⁻¹ 型
	(3.2)	(3.2)	(3.5)	(3.5)
	*mi+kêsi 「神輿」	*puta+tû 「二つ」	*su+gäta 「姿」	*itu+tü 「五つ」
shorthand	/H.HL.M/	/H.Ø.HLM/	/L.LH.M/	/L.Ø.LHM/
	LHHL⁻¹ 型	LHHL⁻² 型	LHLH⁻¹ 型	
	(3.5)	(3.5)	(3.6/7)	
	*äsa+pî 「朝日」	*jä+kâta 「屋形」	*pîta+tü 「一つ」	
shorthand	/LH.Ø.HLM/	/LH.HL.M/	/LH.Ø.LHM/	

- 語声調言語である。
 - トーンの連結する位置は基底声調と語形成から予測可能であるので、(音韻規則が生産的である時期までの)日琉祖語は、基底レベルで「位置の対立」のない「語声調言語」(早田 1999)である²。

² 児玉 (2020: 223) 「ポリワノフが持ち込んだ構造主義言語学の最後の宿題は、日本祖語のアクセント体系は位置アクセント体系であったのか、そうではない体系なのか、あるいはこれらを生み出すことのできる何か別の弁別体系なのかを明らかに」することと述べているが、この問いに対する本研究の答えは、「位置アクセント体系とそうではない体系とを生み出すことができる、語声調言語である」となる。

2.3 後期日琉祖語における tonogenesis

- 複合形式の持つ表層型に以下の音変化(第4.8節)が生じ、問題の音韻規則が生産性を失う。
 - HL⁻¹型が HL⁻²に合流
 - LH⁻¹型、LHHL⁻¹型、LHHL⁻²型が LH⁻²型に合流
 - LHLH⁻¹型が LH型に合流。
- その結果、新たに HL⁻²類(3.2)と LH⁻²類(3.5)が他の類と対立するようになるという tonogenesis が生じる。
- この体系(後期日琉祖語と呼ぶ)は位置の対立を持つので、語声調言語ではない。

	H類 (1.1)	HL類 (1.2)	L類 (1.3)	LH類 (1.3b)
	*ká 「蚊」 \ H M	*ná 「名」 / \ H L M	*ná 「菜」 \ L M	*pǎ 「齒」 / \ L H M
shorthand	/HM/	/HLM/	/LM/	/LHM/
	(2.1)	(2.2)	(2.3)	(2.4/5)
	*táka 「鷹」 \ H M	*kápa 「川」 / \ H L M	*jàma 「山」 \ L M	*káma 「鎌」 / \ L H M
shorthand	/H.M/	/HL.M/	/L.M/	/LH.M/
	(3.1)		(3.4)	(3.6/7)
	*íkari 「錨」 \ H M		*pàsami 「鋏」 \ L M	*pídari 「左」 / \ L H M
shorthand	/H.∅.M/		/L.∅.M/	/LH.∅.M/
		HL ⁻² 類 (3.2)		LH ⁻² 類 (3.5)
		*putātu 「二つ」 / \ H L M		*sugāta 「姿」 / \ L H M
shorthand		/H.HL.M/		/L.LH.M/

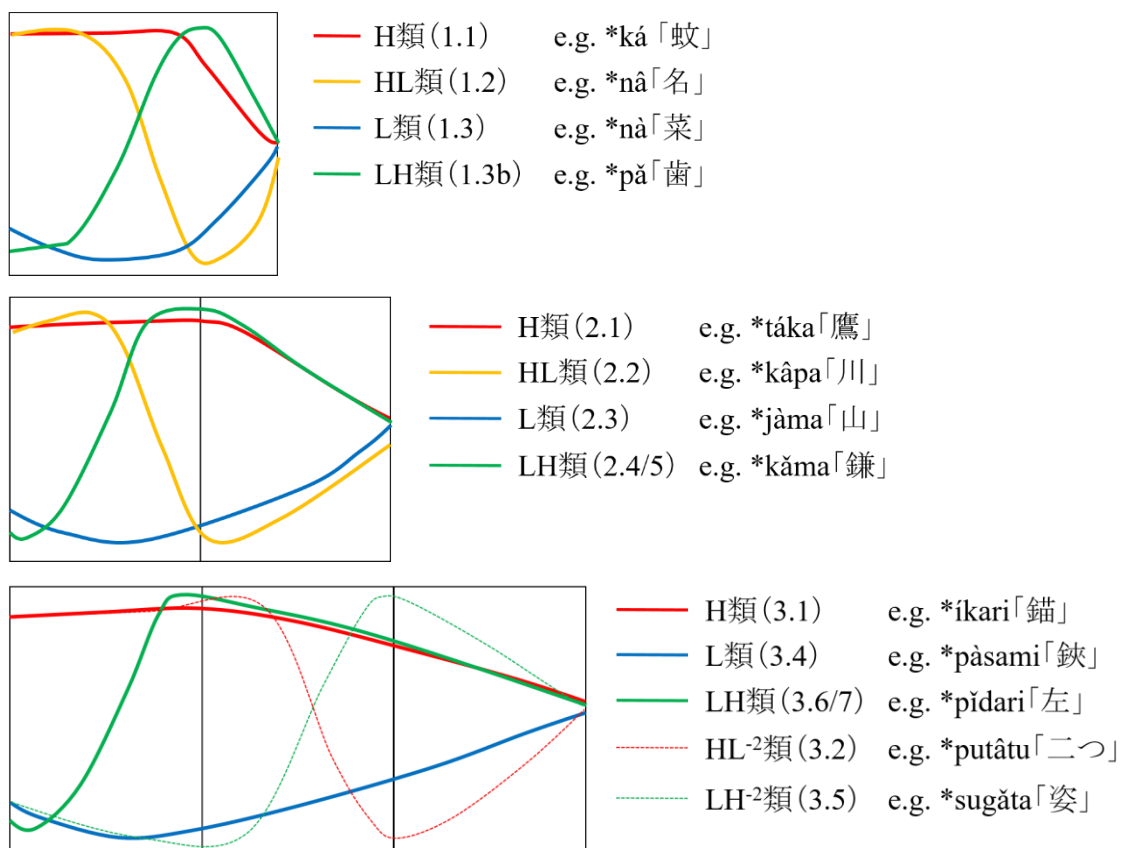


図1: 日琉祖語四声仮説における声調の音声実現の模式図的表示。3音節語の点線は後期日琉祖語で新たに発生した類。

3. 日琉祖語から甲種・乙種アクセント体系への分岐—最少の音変化の再建

3.1 甲種アクセントと乙種アクセント

- 類型論的ではなく系統論的な概念を表す用語として、伝統的な用語「甲種」「乙種」を復活させ、以下のように定義する。
- **甲種アクセント**
 - 名義抄式、中央式、垂井式、(伊吹式、讃岐式、真鍋式) の総称
- **乙種アクセント**
 - 外輪式、内輪式、中輪式の総称
- 甲種・乙種をそれぞれ持つ言語は、それぞれ単系統群をなし、共通改新である音変化によって定義される。
- 甲種祖語は「語頭単調化」(第3.2節)によって、乙種祖語は「低調遅延」(第3.3節)によって定義される。
- 外輪式・内輪式、中輪式が地理的に不連続な形で分布している事実を説明するために再建せざるを得ない並行変化は、「低調弱化」(第3.5節)と「核再分析」(第3.6節)であり、前者は4回、後者は6回並行的に生じたとする。
- 以下は今後の課題
 - 3.5aと3.5bの区別(松森1997)の位置づけ次第で、伊吹式、讃岐式、真鍋式を持つ諸言語の系統的位置は変わりうる。
 - 西南部九州諸語と琉球諸語も乙種祖語に属する(その中でも九州外輪と単系統群をなす)とみなせる見通しを持っている。

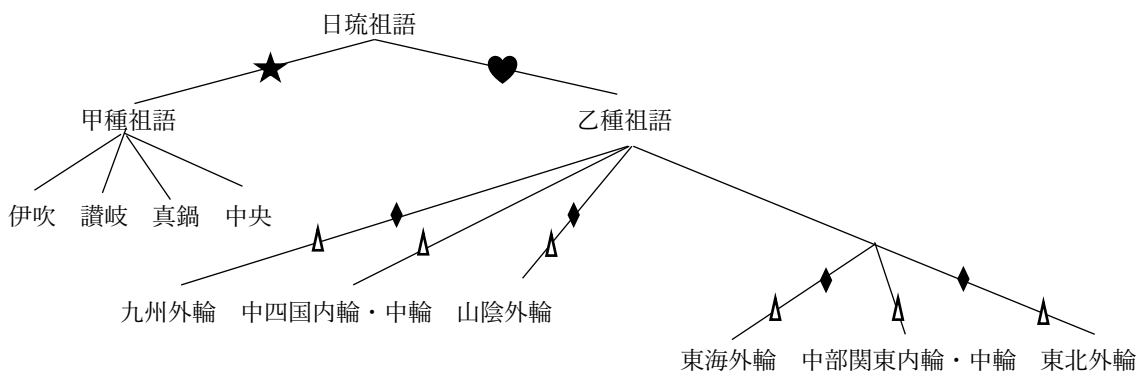


図2: アクセント体系に基づいた日琉諸語の系統樹 (★: 語頭単調化、♥: 低調遅延、◆: 低調弱化、△: 核再分析). 東海外輪、中部関東内輪・中輪、東北外輪を単系統群とする根拠はアクセント体系ではなく五十嵐(2021)に基づく。

3.2 後期日琉祖語から甲種祖語への分岐

- 語頭単調化 (Initial Monotonization) : 起伏式[+A]声調の2番目のトーンが後続音節に移動する。

➤ HL類 : *HL.M > *H.LM LH類 : *LH.M > *L.HM *LH.∅.M > *L.H.M
 HL²類 : *H.HL.M > *H.H.LM LH²類 : *L.LH.M > *L.L.HM

	H類	HL類	L類	LH類
	(2.1)	(2.2)	(2.3)	(2.4/5)
	*taka 「鷹」 H M	*kapa 「川」 H L M	*jama 「山」 L M	*kama 「鎌」 L H M
		∨		∨
	*taka 「鷹」 H M	*kapa 「川」 H L M	*jama 「山」 L M	*kama 「鎌」 L H M
shorthand	/H.M/	/H.LM/	/L.M/	/L.HM/
	(3.1)	(3.4)	(3.6/7)	
	*ikari 「錨」 H M	*pasami 「鋏」 L M	*pidari 「左」 L H M	
			∨	
	*ikari 「錨」 H M	*pasami 「鋏」 L M	*pidari 「左」 L H M	
shorthand	/H.∅.M/	/L.∅.M/	/L.H.M/	
		HL ² 類 (3.2)		LH ² 類 (3.5)
		*putatu 「二つ」 H L M		*sugata 「姿」 L H M
		∨		∨
		*putatu 「二つ」 H L M		*sugata 「姿」 L H M
shorthand		/H.H.LM/		/L.L.HM/

3.3 後期日琉祖語から乙種祖語への分岐

- 低調遅延 (Low tone delay) : 最後の L トーンが語末音節に移動する。
 - HL 類 : *HL.M > *H.LM L 類 : *L.M > *∅.LM *L.∅.M > *∅.∅.LM
 - HL² 類 : *H.HL.M > *H.H.LM :

	H 類	HL 類	L 類	LH 類
	(2.1)	(2.2)	(2.3)	(2.4/5)
	H 類	HL 類	L 類	LH 類
	*taka 「鷹」 	*kapa 「川」 	*jama 「山」 	*kama 「鎌」
		∇	∇	
	*taka 「鷹」 	*kapa 「川」 	*jama 「山」 	*kama 「鎌」
shorthand	/H.M/	/H.LM/	/∅.LM/	/LH.M/
	(3.1)		(3.4)	(3.6/7)
	*ikari 「錨」 		*pasami 「鋏」 	*pidari 「左」
			∇	
	*ikari 「錨」 		*pasami 「鋏」 	*pidari 「左」
shorthand	/H.∅.M/		/∅.∅.LM/	/LH.∅.M/
		HL² 類		LH² 類
		(3.2)		(3.5)
		*putatu 「二つ」 		*sugata 「姿」
		∇		
		*putatu 「二つ」 		*sugata 「姿」
shorthand		/H.H.LM/		/L.LH.M/

3.4 甲種祖語と乙種祖語の体系の比較

- 甲種祖語では語頭音節内部の上昇が解消されている。
- 乙種祖語では、2.1、3.1を除いて、かならず音節内部の上昇 (LH、LM) がある。

	甲種祖語		乙種祖語
H 類 (2.1)	*H.M	::	*H.M
HL 類 (2.2)	*H.LM	::	*H.LM
L 類 (2.3)	*L.M	::	*∅.LM
LH 類 (2.4/5)	*L.HM	::	*LH.M
H 類 (3.1)	*H.∅.M	::	*H.∅.M
HL ⁻² 類 (3.2)	*H.H.LM	::	*H.H.LM
L 類 (3.4)	*L.L.M	::	*∅.∅.LM
LH ⁻² 類 (3.5)	*L.L.HM	::	*L.LH.M
LH 類 (3.6/7)	*L.H.M	::	*LH.∅.M

3.5 前-外輪体系の成立

- 低調弱化 (Low tone reduction) : H と M に挟まれた L が消える。
 - HL 類 : *H.LM > *H.M HL⁻² 類 : *H.H.LM > *H.∅.M :
- 九州外輪、山陰外輪、東海外輪、東北外輪に並行的に生じた変化。
- この変化により、2.1 と 2.2、3.1 と 3.2 が合流する。

	乙種祖語		前-外輪体系
H 類 (2.1)	*H.M	=	*H.M
HL 類 (2.2)	* H.LM	>	* H.M
L 類 (2.3)	*∅.LM	=	*∅.LM
LH 類 (2.4)	*LH.M	=	*LH.M
H 類 (3.1)	*H.∅.M	=	*H.∅.M
HL ⁻² 類 (3.2)	* H.H.LM	>	* H.∅.M
L 類 (3.4)	*∅.∅.LM	=	*∅.∅.LM
LH ⁻² 類 (3.5)	*L.LH.M	=	*L.LH.M
LH 類 (3.6/7)	*LH.∅.M	=	*LH.∅.M

3.6 外輪体系と内輪・中輪体系の成立

- **核再分析**： 上昇のみを声調の特徴として再分析し、LM を LH に合流させる。
- 九州外輪、山陰外輪、東海外輪、東北外輪、および、中四国内輪・中輪、中部関東内輪・中輪に並行的に生じた変化。
- LH の位置は、外輪体系、内輪・中輪体系におけるアクセント核の位置に一致する。
 - 中輪体系の奈良田 (上野 1976)、外輪体系の杵築 (平子・五十嵐 2014) を比較。
- この変化によって乙種諸語の 2.2 と 2.3、3.2 と 3.4 とが合流する (内輪・中輪化)。

	乙種祖語		内輪・中輪体系	
H 類 (2.1)	*H.M	>	* <u>∅</u> . <u>∅</u>	cf. 奈良田 sa.ke 「酒」
HL 類 (2.2)	* <u>H</u> . <u>LM</u>	>	* <u>∅</u> . <u>LH</u>	cf. 奈良田 ka. <u>wa</u> 「川」
L 類 (2.3)	* <u>∅</u> . <u>LM</u>	>	* <u>∅</u> . <u>LH</u>	cf. 奈良田 i. <u>nu</u> 「犬」
LH 類 (2.4/5)	* <u>LH</u> .M	>	* <u>LH</u> . <u>∅</u>	cf. 奈良田 <u>ka</u> .ta 「肩」
H 類 (3.1)	*H. <u>∅</u> .M	>	* <u>∅</u> . <u>∅</u> . <u>∅</u>	cf. 奈良田 ko.to.ei 「今年」
HL ⁻² 類 (3.2)	* <u>H</u> . <u>H</u> . <u>LM</u>	>	* <u>∅</u> . <u>∅</u> . <u>LH</u>	cf. 奈良田 <u>∅</u> u.ta. <u>ri</u> 「二人」
L 類 (3.4)	* <u>∅</u> . <u>∅</u> . <u>LM</u>	>	* <u>∅</u> . <u>∅</u> . <u>LH</u>	cf. 奈良田 o.to. <u>ko</u> 「男」
LH ⁻² 類 (3.5)	* <u>L</u> . <u>LH</u> .M	>	* <u>∅</u> . <u>LH</u> . <u>∅</u>	cf. 奈良田 i. <u>no</u> .tei 「命」
LH 類 (3.6/7)	* <u>LH</u> . <u>∅</u> .M	>	* <u>LH</u> . <u>∅</u> . <u>∅</u>	cf. 奈良田 <u>ku</u> .zi.ra 「鯨」

	前-外輪体系		外輪体系	
H 類 (2.1)	*H.M	>	* <u>∅</u> . <u>∅</u>	cf. 杵築 sa.ke 「酒」
HL 類 (2.2)	*H.M	>	* <u>∅</u> . <u>∅</u>	cf. 杵築 ka.wa 「川」
L 類 (2.3)	* <u>∅</u> . <u>LM</u>	>	* <u>∅</u> . <u>LH</u>	cf. 杵築 i. <u>nu</u> 「犬」
LH 類 (2.4/5)	* <u>LH</u> .M	>	* <u>LH</u> . <u>∅</u>	cf. 杵築 <u>ka</u> .ta 「肩」
H 類 (3.1)	*H. <u>∅</u> .M	>	* <u>∅</u> . <u>∅</u> . <u>∅</u>	cf. 杵築 ko.to.ei 「今年」
HL ⁻² 類 (3.2)	*H. <u>∅</u> .M	>	* <u>∅</u> . <u>∅</u> . <u>∅</u>	cf. 杵築 <u>∅</u> u.ta.ri 「二人」
L 類 (3.4)	* <u>∅</u> . <u>∅</u> . <u>LM</u>	>	* <u>∅</u> . <u>∅</u> . <u>LH</u>	cf. 杵築 o.to. <u>ko</u> 「男」
LH ⁻² 類 (3.5)	* <u>L</u> . <u>LH</u> .M	>	* <u>∅</u> . <u>LH</u> . <u>∅</u>	cf. 杵築 i. <u>no</u> .tei 「命」
LH 類 (3.6/7)	* <u>LH</u> . <u>∅</u> .M	>	* <u>LH</u> . <u>∅</u> . <u>∅</u>	cf. 杵築 <u>ku</u> .dzi.ra 「鯨」

3.7 最少の音変化

- 筆者の知る限り、日琉祖語四声仮説は、乙種アクセントを成立させるための音変化の回数が最少の仮説である。
- 祖語から乙種アクセントに至るまで、金田一 (1954) が複数回想定する「山の後退」や「語頭隆起」は一度も想定されない。

4. 3.2 類と 3.5 類の発生—最少の声調の再建

4.1 概要

- 3.2 と 3.5 は複合形式に適用される音韻規則によって派生された二次的な型に由来する類とみなすことで、日琉祖語の基底声調の数を 4 まで減らせる。
- そのためには、3.2 と 3.5 が複合形式であることを示し、それに適用される音韻規則を再建せねばならない。
- 本節では 2 要素 (1 音節+2 音節、2 音節+1 音節) からなる 3 音節複合形式に適用される音韻規則 (所謂、複合語アクセント規則) を再建する。
- 二次的な型の生起は、複合形式の構成要素の基底声調と複合形式の語形成から予測可能なので、音韻規則が生産的である限り、二次的な型は他の類と対立しない。
- 日琉祖語に遡る語で 3.2・3.5 対応のものはすべて複合形式由来でなければならない。
 - 3.2 は「小豆」を除いてすべて透明性の高い複合形式であることは明らかであり、「小豆」も **adui* 2.1 「味」を含む複合形式の可能性が指摘できる。
 - 3.5 の借用語 (考察外)
 - ◇ 「瓦」(梵語)、「柘榴」(シナ語)、「涙」(タイ・カダイ祖語(!) (Vovin 2010))
 - 3.5 の 4 音節語 (縮約の結果。考察外)
 - ◇ 「神楽」(**kamu+kura*)、「主」(**ar-o+nusi*)、「鱈」(**kara+aipi*)
 - 3 要素からなる複合形式 (考察外)
 - ◇ 「情け」、「眼」、「命」
 - 複合形式として直ちに分析できない語 (問題。今後の課題)
 - ◇ 「油」「柱」「哀れ」「箸」「紅葉」の 5 語³
- 複合形式に適用される音変化、複合形式の語彙化 (一語化) などによって、二次的な表層型を派生させる音韻規則が非生産的になることで、二次的な型の生起が規則によって予測不可能になり、二次的な型が他の型と対立するようになる *tonogenesis* が生じる。これにより 3.2 類と 3.5 類が発生する。
- 問題の音韻規則が非生産的になった時代の言語を後期日琉祖語と呼ぶことにする。

³ 本稿の枠組みでは、3.5 対応となる複合形式は前部要素が[-H] (L 類、LH 類) で後部要素が[+A] (LH 類、HL 類) でなければならない。*abura* 「油」と *fasira* 「柱」に関しては、それぞれ前部要素が L 類の動詞 **abur-* 「炙る」と **päsir-* 「走る」である可能性があり、もしそうであるならば後部要素は **a* となる。この **a* が LH 類か HL 類であれば、問題の 2 語は 3.5 対応となる。したがって動詞につく HL 類の **a* あるいは LH 類 **a* が再建されることになるが、その機能は不明である。**namida* 「涙」についても、動詞 **mít-* 「満ちる」と **a/ä* を含む可能性がある。「涙」が **nà+mít+a* と分析できるのならば、最初の **nà* は Vovin (2010) の再建する **na* 「水」がふさわしい。*afare* 「哀れ」にも同様の語形成を見出すことができるかもしれない。

4.2 金田一のアクセント類と、基底声調・語形成との対応

- 金田一語類の3音節名詞(3.1~3.7類) 255語のうち、2要素からなる複合形式であると推定できるものは109語。
- 109語のうち、各要素の基底声調が明らかなもの(自由形式の確例があるもの)と、基底声調が内的再建により推定できるものは84語。
- この84語を、前部要素の基底声調(H、HL、L、LH) × 後部要素の基底声調(H、HL、L、LH) × 語形成(1音節+2音節、2音節+1音節) = 4 × 4 × 2 = 32条件に分配する。
- 各条件の成員のアクセント類が均質なものであれば、本稿の仮説が支持される。
- 図3に示すように、基底声調L+Hの組み合わせに1対多の対応が目立つが、それ以外は各条件の成員のアクセント類はおおよそ均質である。
- 約75%の語は、基底声調と語形成から表層型が予測できる。

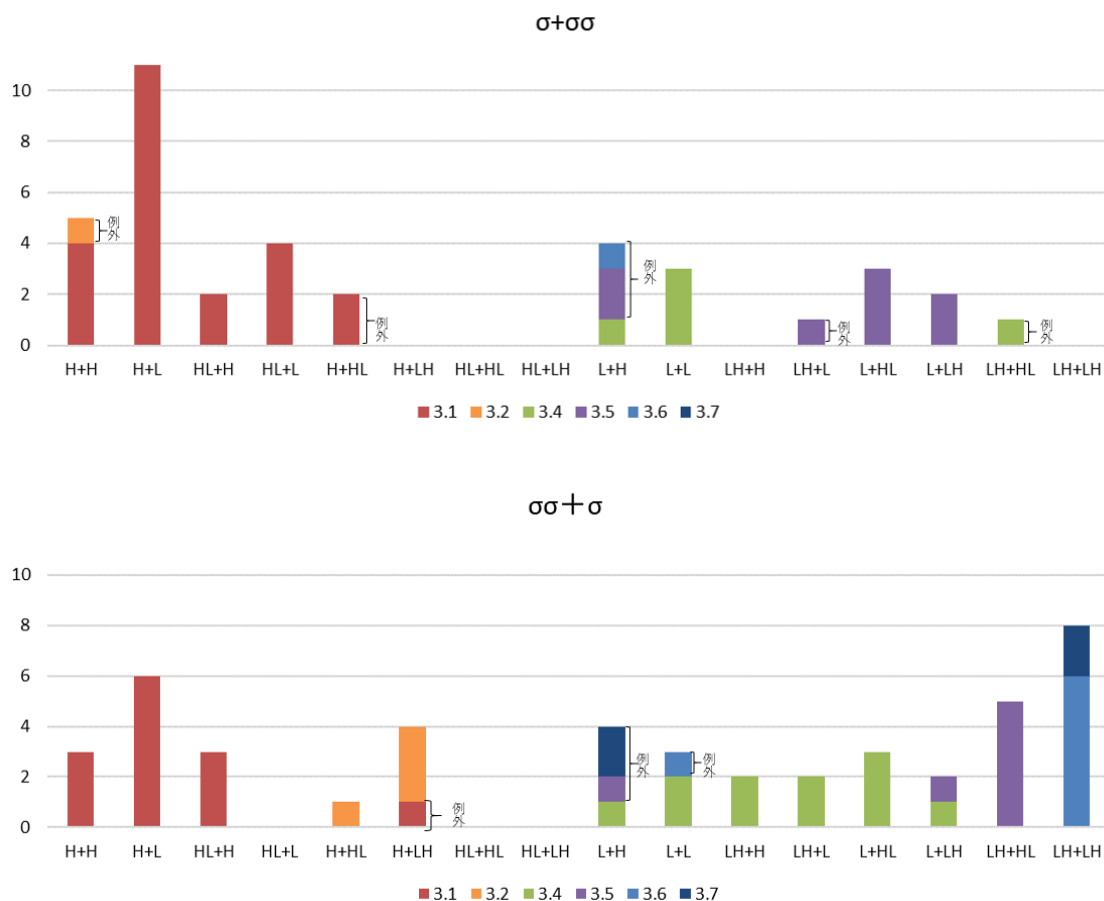


図3: 複合語の基底声調・語形成と金田一のアクセント類との対応(語数)。「例外」は(4)の音韻規則の例外となるもの。

4.3 音韻規則

- 図3の分布を説明するための、可能な限り簡潔かつ音韻論的基盤を持つ音韻規則を提案する(4)。

(4) a. 前部要素が[-H, +A] (LH) で後部要素が[±H, +A] (HL, LH) の場合：

構成要素の基底声調をそのまま実現せよ。

b. (4a) 以外の場合：

前部要素の[±H]と後部要素の[±A]の素性を持つトーンを複合形式のトーンとせよ。

[+A]の場合はトーンを後部要素の最初の音節に連結させ、[-A]の場合はトーンを前部要素の最初の音節に連結させよ。

- いわば(4a)は前部要素の「式」を保持し(「式保存の法則」(和田1942))、後部要素の「核」を保持する規則であり、「語声調」(種類の対立)と「アクセント」(位置の対立)兼ね備える現代京都語に早田(1999)が提案する複合語アクセント規則とその根幹を同じくする。

4.4 3音節複合形式の語形成と基底声調の再建

- 金田一語類84語について再建した語形成と基底声調を(5-36)に示す。
- 語形成の再建はMartin(1987)に負うところが大きい。Martin(1987)に従った項目には“M”と記す。
- 構成要素の類の再建はMartin(1987)、秋永他(編)(1997)『日琉語類別語彙』(五十嵐2019)を参照し行った。
 - 動詞転成名詞については、高起式を1.1, 2.1、低起式を1.3, 2.3とした。
 - 低起式形容詞語根は一律2.4(LH類)と解釈した。
 - 平安時代後期京都語の語形、アクセントはMartin(1987)、秋永他(編)(1997)による。

(5) $H_{\sigma} + H_{\sigma\sigma} \rightarrow H$ 型 ([+H, -A] + [+H, -A] \rightarrow [+H, -A])

- | | | |
|----|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------|
| a. | *kuá _{1,1} 「子」 + *úsi _{2,1} 「牛」 \rightarrow *kuá+usi _{3,1} 「仔牛」 M⁴ | MJ <i>kousi</i> H.H.H |
| b. | *kuá _{1,1} 「子」 + *tómə _{2,1} 「共」 \rightarrow *kuá+dəmə _{3,1} 「子供」 M | MJ <i>kodomo</i> H.H.H |
| c. | *kuá _{1,1} 「子」 + *tóri _{2,1} 「鳥」 \rightarrow *kuá+təri _{3,1} 「小鳥」 M | |
| d. | *kó _{1,1} 「此」 + *jəpi _{2,1} 「宵」 \rightarrow *kó+jəpi _{3,1} 「今宵」 M | MJ <i>kojofi</i> H.H.X |

⁴ *kua 「子」と *mia 「女」の再建はCelik(2022)による。Celik(2022)はさらにこれらを *ku-a、*mi-a と分析する。

- (6) $H_{\sigma\sigma} + H_{\sigma} \rightarrow H$ 型 ([+H, -A] + [+H, -A] \rightarrow [+H, -A])
- a. *pána_{2.1} 「鼻」 + *tí_{1.1} 「血」 \rightarrow *pána+di_{3.1} 「鼻血」 **M** MJ *fanadi* H.H.H
 - b. *káma_{2.1} 「釜」 + *tó_{1.1} 「戸」 \rightarrow *káma+do_{3.1} 「竈」 **M**
 - c. *mús-o_{2.1?} 「生ず」 + *kuá_{1.1} 「子」 \rightarrow *mús-o+kuá_{3.1} 「息子」 **M** MJ *musuko* H.H.H
※例外 3.2 「毛抜き」 *kái_{2.1} 「毛」 + *núk-i_{2.1} 「抜き」 **M** (MJ *kenuki* H.H.L)
- (7) $H_{\sigma} + L_{\sigma\sigma} \rightarrow H$ 型 ([+H, -A] + [-H, -A] \rightarrow [+H, -A])
- a. *kí_{1.1} 「着」 + *mənə_{2.3} 「物」 \rightarrow *kí+mənə_{3.1} 「着物」 **M**
 - b. *kó_{1.1} 「此」 + *təsi_{2.3} 「年」 \rightarrow *kó+təsi_{3.1} 「今年」 **M** MJ *kotosi* H.H.H
 - c. *kuá_{1.1} 「子」 + *jama_{2.3} 「山」 \rightarrow *kuá+jama_{3.1} 「小山」 **M** MJ *kojama* H.H.H
 - d. *ní_{1.1} 「煮」 + *kapa_{2.3} 「皮」 \rightarrow *ní+kapa_{3.1} 「膠」 **M** MJ *nikaŋa* H.H.H
 - e. *náí_{1.1} 「寝」 + *kətə_{2.3} 「言」 \rightarrow *náí+gətə_{3.1} 「寝言」 **M** MJ *negoto* H.H.H
 - f. *mí_{1.1} 「御」 + *kàta_{2.3} 「片」 \rightarrow *mí+kata_{3.1} 「味方」 **M** MJ *mikata* H.H.H
 - g. *mé_{1.1} 「水」 + *kìpa_{2.3} 「際」 \rightarrow *mé+gìpa_{3.1} 「水際」 **M** MJ *migifa* H.H.H
 - h. *mí_{1.1} 「御」 + *jàma_{2.3} 「山」 \rightarrow *mí+jama_{3.1} 「深山」 **M**
 - i. *mí_{1.1} 「三」 + *ùka_{2.3?} 「日」 \rightarrow *mí+uka_{3.1} 「三日」 MJ *mikka* H.H.H
 - j. *jó_{1.1} 「四」 + *ùka_{2.3?} 「日」 \rightarrow *jó+uka_{3.1} 「四日」 MJ *jokka* H.H.H
 - k. *já_{1.1} 「八」 + *ùka_{2.3?} 「日」 \rightarrow *ja+uka_{3.1} 「八日」 MJ *jauka* H.H.H
- (8) $H_{\sigma\sigma} + L_{\sigma} \rightarrow H$ 型 ([+H, -A] + [-H, -A] \rightarrow [+H, -A])
- a. *kútu_{2.1} 「口」 + *wà_{1.3} 「輪」 \rightarrow *kútu+wà_{3.1} 「轡」 **M** MJ *kutuwa* H.H.H
 - b. *sáka_{2.1} 「酒」 + *nà_{1.3} 「菜」 \rightarrow *sáka+nà_{3.1} 「肴」 **M** MJ *sakana* H.H.H
 - c. *ták-i_{2.1} 「焚き」 + *kəi_{1.3} 「木」 \rightarrow *ták-i+gəi_{3.1} 「薪」 **M** MJ *takigi* H.H.X
 - d. *túg-i_{2.1} 「継ぎ」 + *tài_{1.3} 「手」 \rightarrow *túg-i+dài_{3.1} 「序で」 **M** MJ *tuide* H.H.H
 - e. *páni_{2.1} 「埴」 + *wà_{1.3} 「輪」 \rightarrow *páni+wà_{3.1} 「埴輪」 **M** MJ *faniwa* H.H.H
 - f. *pítu_{2.1} 「櫃」 + *kəi_{1.3} 「木」 \rightarrow *pítu+gəi_{3.1} 「棺」 **M** MJ *fitugi* H.H.H
- (9) $HL_{\sigma} + H_{\sigma\sigma} \rightarrow H$ 型 ([+H, +A] + [+H, -A] \rightarrow [+H, -A])
- a. *tí_{1.2} 「茅」 + *mák-i_{2.1} 「巻き」 \rightarrow *tí+mák-i_{3.1} 「粽」 **M** MJ *timaki* H.H.H
 - b. *pí_{1.2} 「日」 + *jər-i_{2.1} 「寄り」 \rightarrow *pí+jər-i_{3.1} 「日和」 **M**
- (10) $HL_{\sigma\sigma} + H_{\sigma} \rightarrow H$ 型 ([+H, +A] + [+H, -A] \rightarrow [+H, -A])
- a. *ípa_{2.2} 「岩」 + *pó_{2.1} 「秀」 \rightarrow *ípa+pó_{3.1} 「巖」 MJ *ifafo* H.H.H
 - b. *káta_{2.2} 「形」 + *tí_{2.1} 「魂?」 \rightarrow *káta+tí_{3.1} 「形」 **M** MJ *katati* H.H.H
 - c. *kúra_{2.2} 「座」 + *wói_{2.1} 「居」 \rightarrow *kúra+wói_{3.1} 「位」 **M** MJ *kurawi* H.H.H

- (11) $HL_{\sigma} + L_{\sigma\sigma} \rightarrow H$ 型 $([+H, +A] + [-H, -A] \rightarrow [+H, -A])$
- a. *pî_{1.2} 「日」 + *sàs-i_{2.3} 「差し」 \rightarrow *pí+sasi_{3.1} 「庇」 **M** MJ *fisasi* H.H.H
- b. *pî_{1.2} 「日」 + *tàir-i_{2.3} 「照り」 \rightarrow *pí+dair-i_{3.1} 「日照り」 **M** MJ *fideri* H.H.X
- c. *jâ_{1.2} 「矢」 + *kùra_{2.3} 「蔵」 \rightarrow *já+gura_{3.1} 「櫓」 **M** MJ *jagura* H.H.H
- d. *jâ_{1.2} 「矢」 + *siri_{2.3} 「尻」 \rightarrow *já+ziri_{3.1} 「矢尻」 **M** MJ *jaziri* H.H.H
- (12) $HL_{\sigma\sigma} + L_{\sigma} \rightarrow H$ 型 $([+H, +A] + [-H, -A] \rightarrow [+H, -A])$
- a. cf. *kâta_{2.2} 「形」 + *mî_{1.3} 「見」 \rightarrow *káta+mi_{3.1} 「形見」 **M** MJ *katami* H.H.H
- (13) $H_{\sigma} + HL_{\sigma\sigma} \rightarrow HL^{-2}$ 型 $([+H, -A] + [+H, +A] \rightarrow [+H, +A])$
- a. cf. *tó_{1.1} 「戸」 + *pîra_{2.2} 「平」 \rightarrow *to+bîra_{3.2} 「扉」 **M** MJ *tobira* H.H.L
- b. cf. *mî_{1.1} 「御」 + *kôsi_{2.2} 「輿」 \rightarrow *mi+kôsi_{3.2} 「神輿」 **M** MJ *mikosi* H.H.L
- ※例外 3.1 「夫」 *wó_{1.1} 「雄」 + *pît_{2.2} 「人」 **M** (MJ *wofuto* H.H.H)⁵
- ※例外 3.1 「仕業」 *sí_{1.1} 「為」 + *wâza_{2.2} 「技」 **M** (MJ *siwaza* H.H.H)
- (14) $H_{\sigma\sigma} + HL_{\sigma} \rightarrow HL^{-1}$ 型 $([+H, -A] + [+H, +A] \rightarrow [+H, +A])$
- a. *púta_{2.1?} 「二」 + *piâ_{1.2?} 「重」 \rightarrow *puta+piâ_{3.2} 「二重」 **M** MJ *futafe* H.H.L
- (15) $H_{\sigma} + LH_{\sigma\sigma} \rightarrow HL^{-2}$ 型 $([+H, -A] + [-H, +A] \rightarrow [+H, +A])$
- a. cf. *pó_{1.1} 「帆」 + *kâita_{2.4} 「桁」 \rightarrow *po+gâita_{3.2} 「帆桁」 **M** MJ *fogeta* H.H.L
- (16) $H_{\sigma\sigma} + LH_{\sigma} \rightarrow HL^{-1}$ 型 $([+H, -A] + [-H, +A] \rightarrow [+H, +A])$
- a. *mús-o_{2.1} 「生ず」 + *miã_{1.3b} 「女」 \rightarrow *mus-o+miã_{3.2} 「娘」 **M** MJ *musume* H.H.L
- b. *púta_{2.1?} 「二」 + *tũ_{1.3b?} 「個」 \rightarrow *puta+tũ_{3.2} 「二つ」 **M** MJ *futatu* H.H.L
- c. *púta_{2.1?} 「二」 + *rî_{1.3b?} 「人」 \rightarrow *puta+rî_{3.2} 「二人」 **M** MJ *futari* H.H.L
- ※例外 3.1 「蓮」 *pâti_{2.1} 「蜂」 + *sũ_{1.3b} 「巢」 **M** (MJ *fatisu* H.H.H)
- (17) $HL_{\sigma} + HL_{\sigma\sigma} \rightarrow HL^{-2}$ 型 $([+H, +A] + [+H, +A] \rightarrow [+H, +A])$
- a. cf. *jâ_{1.2} 「矢」 + *kâra_{2.2} 「柄」 \rightarrow *ja+gâra_{3.2} 「矢柄」 **M** MJ *jagara* H.H.L
- (18) $HL_{\sigma\sigma} + HL_{\sigma} \rightarrow HL^{-1}$ 型 $([+H, +A] + [+H, +A] \rightarrow [+H, +A])$
- a. N/A
- (19) $HL_{\sigma} + LH_{\sigma\sigma} \rightarrow HL^{-2}$ 型 $([+H, +A] + [-H, +A] \rightarrow [+H, +A])$

⁵ 「夫」は平安時代後期京都語ですでに第2音節の分節音の脱落が認められることから (MJ *wouto* ~ *wofuto?* L.H.H)、縮約 (contraction) が変化を招いた可能性もある。

- a. N/A
- (20) $HL_{\sigma\sigma} + LH_{\sigma} \rightarrow HL^{-1}$ 型 ($[+H, +A] + [-H, +A] \rightarrow [+H, +A]$)
- a. cf. **sita*_{2,2} 「下」 + **mō*_{1,3b} 「裳」 \rightarrow **sita+mō*_{3,2} 「下裳」 **M** MJ *sitamo* H.H.L
- (21) $L_{\sigma} + H_{\sigma\sigma} \rightarrow L$ 型 ($[-H, -A] + [+H, -A] \rightarrow [-H, -A]$)
- a. **tā*_{1,3} 「手」 + **múk-ai*_{1,1} 「向け」 \rightarrow **tā+muk-ai*_{3,4} 「手向>峠」 **M** MJ *tamuke* L.L.L
 ※例外 3.5 「襷」 **tā*_{1,3} 「手」 + **súk-i*_{2,1} 「助き」 **M** (MJ *tasuki* L.L.H)
 ※例外 3.5 「錦」 **nī*_{1,3} 「丹」 + **sík-i*_{2,1} 「敷き」 **M** (MJ *nisiki* L.H.H) ⁶
 ※例外 3.6 「李」 **sū*_{1,3} 「酢」 + **mómə*_{2,1} 「桃」 **M** (MJ *sumomo* L.H.H)
- (22) $L_{\sigma\sigma} + H_{\sigma} \rightarrow L$ 型 ($[-H, -A] + [+H, -A] \rightarrow [-H, -A]$)
- a. **tāni*_{2,3} 「谷」 + **má*_{1,1} 「間」 \rightarrow **tāni+ma*_{3,4} 「谷間」 **M**
 ※例外 3.5 「親子」 **{ə, ò}ja*_{2,3} 「親」 + **kuá*_{1,1} 「子」 **M** ⁷
 ※例外 3.7 「蚕」 **káp-i*_{2,3} 「飼い」 + **kuá*_{1,1} 「子」 **M** (MJ *kafiko* L.H.L)
 ※例外 3.7 「卵」 **tāma*_{2,3} 「玉」 + **kuá*_{1,1} 「子」 **M** ⁸
- (23) $L_{\sigma} + L_{\sigma\sigma} \rightarrow L$ 型 ($[-H, -A] + [-H, -A] \rightarrow [-H, -A]$)
- a. **tā*_{1,3} 「手」 + **mətə*_{2,3} 「元」 \rightarrow **tā+mətə*_{3,4} 「袂」 **M**
 b. **tū*_{1,3} 「唾」 + **pāk-i*_{2,3} 「吐き」 \rightarrow **tū+bak-i*_{3,4} 「唾」 **M** ⁹ MJ *tubaki* L.L.L
 c. **ū*_{1,3??} 「？」 + **sipo*_{2,3} 「潮」 \rightarrow **ū+sipo*_{3,4} 「潮」 **M** MJ *usifō* L.L.L
 d. **ā*_{1,3??} 「？」 + **tāma*_{2,3} 「玉」 \rightarrow **ā+tāma*_{3,4} 「頭」 MJ *atāma* L.L.L
 e. **kə*_{1,3??} 「？」 + **jəm-i*_{2,3} 「読み」 \rightarrow **kə+jəm-i*_{3,4} 「曆」 MJ *kojomi* L.L.L
- (24) $L_{\sigma\sigma} + L_{\sigma} \rightarrow L$ 型 ($[-H, -A] + [-H, -A] \rightarrow [-H, -A]$)
- a. **nūp-i*_{2,3} 「縫い」 + **māi*_{1,3} 「目」 \rightarrow **nūp-i+māi*_{3,4} 「縫い目」 **M** MJ *nufime* L.L.L
 b. **tār-i*_{2,3} 「取り」 + **kō*_{1,3} 「籠」 \rightarrow **tār-i+kō*_{3,4} 「虜」 **M** MJ *toriko* L.L.L

⁶ 「錦」は平安時代京都語で *nisiki* L.H.H (3.6 対応) であり、金田一の類との対応が不規則である。また現代日琉諸語でも対応は不規則である。この語が日琉祖語に遡るか否かを検討する必要がある。

⁷ 「親子」は文献の初出が遅く、日琉祖語に遡るか否かが疑わしい。

⁸ 「卵」は文献の初出が非常に遅く、日琉祖語に遡らない可能性が極めて高い。「卵」を意味する上代中央語は *kapiigo* (<**kāpi+gua* ← **kāpi* 「貝」 + **kuá* 「子」) > 3.4 (MJ *kafigo* L.L.L) である。この語も規則の例外となる。また同じく金田一語彙にある **ito* 「愛?」 + **kuá* 「子」 \rightarrow 3.5 「従兄弟」(MJ *itoko* L.L.X) は、前部要素の基底声調が不明であるが、提案される諸規則では後部要素が H 類で LH⁻¹ 類 (3.5) となる複合形式はないので、規則の例外となる。

⁹ 「唾」が **tū* 「唾」 + **pāk-i* 「吐き」と分析できるのならば、提案される規則を支持する証拠となる。しかし上代中央語には動詞 *tupak-* 「唾を吐く」があり、**tupaki* 「唾」はこの動詞の転成名詞である可能性がある(五十嵐 2022b も参照)。

※例外 3.6 「菖蒲」 **aja*_{2,3} 「綾」 + **mài*_{1,3} 「目」 **M**¹⁰

(25) $LH_{\sigma} + H_{\sigma\sigma} \rightarrow L$ ([-H, +A] + [+H, -A] \rightarrow [-H, -A])

a. cf. **jă*_{1,3b} 「屋」 + **síro*_{2,1} 「城」 \rightarrow **jă+síro*_{3,4} 「社」 **M** MJ *jasiro* L.L.L

(26) $LH_{\sigma\sigma} + H_{\sigma} \rightarrow L$ 型 ([-H, +A] + [+H, -A] \rightarrow [-H, -A])

a. **síra*_{2,5} 「白」 + **ká*_{1,1} 「毛」 \rightarrow **síra+ga*_{3,4} 「白髪」 **M**

b. **wătə*_{2,4?} 「甦」 + **kuá*_{1,1} 「子」 \rightarrow **wătə+kuá*_{3,4} 「男」 **M** MJ *wotoko* L.L.L

(27) $LH_{\sigma} + L_{\sigma\sigma} \rightarrow L$ ([-H, +A] + [-H, -A] \rightarrow [-H, -A])

a. cf. **miă*_{1,3b} 「女」 + **uma*_{2,3} 「馬」 \rightarrow **miă+uma*_{3,4} 「雌馬」 **M** MJ *meuma* L.L.L

※例外 3.5 「簾」 **sŭ*_{1,3b} 「簾」 + **tăr-ai*_{2,3} 「垂れ」 **M** (MJ *sudare* L.L.H)

(28) $LH_{\sigma\sigma} + L_{\sigma} \rightarrow L$ ([-H, +A] + [-H, -A] \rightarrow [-H, -A])

a. **šmə*_{2,4} 「面」 + **tài*_{1,3} 「手」 \rightarrow **šmə+tai*_{3,4} 「表」 **M** MJ *omote* L.L.L

b. **kăga*_{2,5} 「影」 + **mì*_{1,3} 「見」 \rightarrow **kăga+mì*_{3,4} 「鏡」 **M** MJ *kagami* L.L.L

(29) $L_{\sigma} + HL_{\sigma\sigma} \rightarrow LH^{-2}$ 型 ([-H, -A] + [+H, +A] \rightarrow [-H, +A])

a. **sù*_{1,3} 「素」 + **kâta*_{2,2} 「形」 \rightarrow **su+gâta*_{3,5} 「姿」 **M** MJ *sugata* L.L.H

b. **mâ*_{1,3} 「目」 + **kûra*_{2,2} 「座」 \rightarrow **ma+kûra*_{3,5} 「枕」 MJ *makura* L.L.H

c. **kə*_{1,3??} 「？」 + **kârə*_{2,2} 「自身」 \rightarrow **kə+kârə*_{3,5} 「心」¹¹ MJ *kokoro* L.L.H

(30) $L_{\sigma\sigma} + HL_{\sigma} \rightarrow LH^{-1}$ 型 ([-H, -A] + [+H, +A] \rightarrow [-H, +A])

a. **kătə*_{2,3} 「言」 + **pâ*_{1,2} 「葉」 \rightarrow **kătə+bâ*_{3,4} 「言葉」 **M** MJ *kotoba* L.L.L

b. **üt-i*_{2,3} 「打ち」 + **pâ*_{1,2} 「葉」 \rightarrow **üt-i+pâ*_{3,4} 「団扇」 **M**

c. **kâta*_{2,3} 「片」 + **nâ*_{1,2??} 「刃」 \rightarrow **kata+nâ*_{3,4} 「刀」 **M** MJ *katana* L.L.L

¹⁰ 「菖蒲」は上代中央語で *ajame*₂+*gusa*、平安時代後期京都語で *ajame*+*gusa* で在証されるので *ajame* は後部要素の省略によって発生した語であり、植物名であることに基づく群化によって 3.6 に属していると思われる。

¹¹ 「心」は後部要素に HL 類の **kârə* 「自身」を持つ複合形式であるとする仮説を提案する。前部要素が不明であるが、それが L 類であるならば本稿の規則を支持する。**kârə* 「自身」は上代中央語 *koro* 「自分自身」(ただし音仮名表記無し)、北琉球首里語の「自身で」を表す接辞-*kuru* (< pR **koro*) に反映される語である。上代中央語の *koro* は、松本 (1975) によると、上代中央語の *kara* (< pJ **kara*) 「茎・幹・柄、血縁・素性、故」の母音交替形であり、これらはすべて同源である。琉球祖語には「茎」を意味する pR **koro* が再建され、pJ **kârə* と pJ **kara* が同源であることを裏打ちする。平安後期京都語の *kâra* 「幹・柄」HL が在証され、金田一語類には 2.2 の *kara* 「殻」があるので、問題の pJ **kârə* 「自身」は HL 類 (2.2) とみなすことができる。

- (31) $L_{\sigma} + LH_{\sigma} \rightarrow LH^{-2}$ 型 $([-H, -A] + [-H, +A] \rightarrow [-H, +A])$
- a. *pò_i_{1.3} 「火」 + *päsui_{2.4} 「箸」 \rightarrow *poi+bäsui_{3.5} 「火箸」 **M** MJ *fibasi* L.L.H
- b. *kài_{1.3} 「木」 + *öri_{2.4} 「瓜」 \rightarrow *kəi+öri_{3.5} 「胡瓜」¹² MJ *kiuri* L.L.H
- (32) $L_{\sigma\sigma} + LH_{\sigma} \rightarrow LH^{-1}$ 型 $([-H, -A] + [-H, +A] \rightarrow [-H, +A])$
- a. *itu_{2.3?} 「五」 + *tū_{1.3b?} 「個」 \rightarrow *itu+tū_{3.5} 「五つ」 **M** MJ *itutu* L.L.H~L.L.L
- b. *ūma_{2.3} 「馬」 + *jä_{1.3b} 「屋」 \rightarrow *uma+jä_{3.4} 「厩」 **M** (4.8 参照) MJ *umaja* L.L.L
- (33) $LH_{\sigma} + HL_{\sigma\sigma} \rightarrow LHHL^{-2}$ 型 $([-H, +A] + [+H, +A] \rightarrow [-H, +A] + [+H, +A])$
- a. cf. *jä_{1.3b} 「屋」 + *kâta_{2.2} 「形」 \rightarrow *jä+kâta_{3.5} 「屋形」 **M** MJ *jakata* L.L.H
*例外 3.4 「族」 *jä_{1.3b} 「屋」 + *kâra_{2.2} 「柄」 **M** (MJ *jakara* L.L.L)¹³
- (34) $LH_{\sigma\sigma} + HL_{\sigma} \rightarrow LHHL^{-1}$ 型 $([-H, +A] + [+H, +A] \rightarrow [-H, +A] + [+H, +A])$
- a. *äsa_{2.5} 「朝」 + *pî_{1.2} 「日」 \rightarrow *äsa+pî_{3.5} 「朝日」 **M** MJ *asafi* L.L.H
- b. *pîtə_{2.4?} 「一」 + *piâ_{1.2?} 「重」 \rightarrow *pîtə+piâ_{3.5} 「単衣」 **M** MJ *fitofe* L.L.H
- c. *näsu_{2.4} 「茄子」 + *pî_{1.2??} 「？」 \rightarrow *näsu+bî_{3.5} 「茄子」¹⁴
- d. *äpa_{2.4??} 「？」 + *pî_{1.2??} 「？」 \rightarrow *äpa+bî_{3.5} 「鮑」 MJ *afabi* H.L.L
- e. *wäsa_{2.4??} 「？」 + *pî_{1.2??} 「？」 \rightarrow *wäsa+bî_{3.5} 「山葵」 MJ *wasabi* H.L.L
- f. cf. *pîtə_{2.4?} 「一」 + *pî_{1.2} 「日」 \rightarrow *pîtə+pî_{3.5} 「一日」 **M**
- (35) $LH_{\sigma} + LH_{\sigma\sigma} \rightarrow LHLH^{-2}$ 型 $([-H, +A] + [-H, +A] \rightarrow [-H, +A] + [-H, +A])$
N/A

¹² *kiuri* 3.5 「胡瓜」の前部要素を Martin (1987) は *ki* 「黄」とするが、*ki* 「黄」は H 類であり、*kiuri* 3.5 「胡瓜」と声調が対応しない。また *ki* 「黄」の日琉祖語形は **koi* (Pellard 2013) であり、母音 **oi* は琉球祖語で **i* に反映するが、琉球祖語の「胡瓜」は **keori* であって **kiori* ではないので、「黄瓜」説は母音の対応にも問題がある。上代中央語では ~~*kiuri*~~ 「胡瓜」であることから、上代中央語と琉球祖語の母音の対応は ~~*i*~~ **e* となり、この対応を最もよく説明する日琉祖語の母音は **oi* である。この母音を持つ **kəi* 「木」は L 類 (1.3) であり、「胡瓜」の前部要素として最もふさわしい。

¹³ 琉球祖語 **jakara* 「族・強者」は 3.1/2 対応であり (五十嵐 2018)、日本本土の諸言語でも「族」は 3.1 対応の場合が多く対応が不規則である。

¹⁴ 「茄子」は、その後部要素の基底声調が不明であるが、前部要素 **nasu* の基底声調は現代日琉諸語における対応に基づき R 類 (2.4/5) が再建できる。もし後部要素の基底声調が F 類であれば本稿の規則が支持される。金田一語類の 3.5 には「茄子」のほかに「鮑」と「山葵」がその第 3 音節が /bi/ であり、後部要素を共有しているように思われる。後者の前部要素の基底声調は不明であるが、もし R 類 (2.4/5) であるならば、問題の規則が支持される。日琉祖語には **pî* F 類「日」、**äpa* R 類「粟」、**wäsa* R 類「早稲」が再建されるが、「茄子」「鮑」「山葵」との関連を見出すのは難しい。なお、「鮑」「山葵」の平安後期京都語はそれぞれ *afabi* H.L.L、*wasabi* H.L.L であり、声調の対応が不規則である。

- (36) $LH_{\sigma\sigma} + LH_{\sigma} \rightarrow LHLH^{-1}$ 型 $([-H, +A] + [-H, +A] \rightarrow [-H, +A] + [-H, +A])$
- | | | |
|----|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------|
| a. | $*p\dot{i}t\dot{e}_{2,4?}$ 「一」 + $*t\ddot{u}_{1,3b?}$ 「個」 $\rightarrow *p\dot{i}t\dot{e}+t\ddot{u}_{3,7}$ 「一つ」 M | MJ <i>fitotu</i> L.H.L |
| b. | $*p\dot{i}t\dot{e}_{2,4?}$ 「一」 + $*r\ddot{i}_{1,3b?}$ 「人」 $\rightarrow *p\dot{i}t\dot{e}+r\ddot{i}_{3,7}$ 「一人」 M | MJ <i>fitori</i> L.H.L |
| c. | $*s\ddot{i}ra_{2,5}$ 「白」 + $*m\ddot{i}_{1,3b?}$ 「虫?」 $\rightarrow *s\ddot{i}ra+m\ddot{i}_{3,6}$ 「虱」 | MJ <i>sirami</i> L.H.H |
| d. | $*t\ddot{a}ka_{2,4?}$ 「高」 + $*s\ddot{a}_{1,3b?}$ 「さ」 $\rightarrow *t\ddot{a}ka+s\ddot{a}_{3,6}$ 「高さ」 M | MJ <i>takasa</i> L.H.H |
| e. | $*n\ddot{a}ga_{2,4?}$ 「長」 + $*s\ddot{a}_{1,3b?}$ 「さ」 $\rightarrow *n\ddot{a}ga+s\ddot{a}_{3,6}$ 「長さ」 M | MJ <i>nagasa</i> L.H.H |
| f. | $*p\ddot{i}r\dot{e}_{2,4?}$ 「広」 + $*s\ddot{a}_{1,3b?}$ 「さ」 $\rightarrow *p\ddot{i}r\dot{e}+m\ddot{i}_{3,6}$ 「広さ」 M | MJ <i>firosa</i> L.H.H |
| g. | cf. $*w\ddot{a}t\dot{e}_{2,4?}$ 「甦」 + $*m\ddot{i}\ddot{a}_{1,3b}$ 「女」 $\rightarrow *w\ddot{a}t\dot{e}+m\ddot{i}\ddot{a}_{3,6}$ 「乙女」 M | MJ <i>wotome</i> L.H.H |
| h. | cf. $*\ddot{u}su_{2,4}$ 「臼」 + $*p\ddot{a}_{1,3b}$ 「齒」 $\rightarrow *\ddot{u}su+b\ddot{a}_{3,6}$ 「臼齒」 M | MJ <i>usuba</i> L.H.L |

4.5 音韻規則によって派生された型

- (4) の音韻規則によって 8 種類の二次的な型が派生される (37)。

(37) HL^{-1} 型、 HL^{-2} 型、 LH^{-1} 型、 LH^{-2} 型、 $LHHL^{-1}$ 型、 $LHHL^{-2}$ 型、 $LHLH^{-1}$ 型、 $LHLH^{-2}$ 型 (在証明されず)

- (37) の 8 種類に、単純形式に (も) 現れる 4 種類の型、H 型、L 型、LH 型 (HL 型は無し) を加えて、日琉祖語の 3 音節語には少なくとも 11 種類の表層型が現れることになる。これらの一部に第 4.8 節で論じる音変化が生じることによって、後期日琉祖語はその型の数を 5 種類 (38) にまで減らす。

(38) H 型 (3.1)、 HL^{-2} 型 (3.2)、L 型 (3.4)、 LH^{-2} 型 (3.5)、LH 型 (3.6/7)

4.6 $LH-HL^{-1}$ 型と讃岐式等の「3.5 類・朝日類」

- 3.5 類に属する語の型は $LH^{-1} \cdot LH^{-2}$ と $LHHL^{-1}$ 型とがある。
 - LH^{-2} 型 $su+g\ddot{a}ta$ 「姿」、 $ma+k\ddot{u}ra$ 「枕」、 $k\ddot{e}+k\ddot{a}r\ddot{e}$ 「心」、 $poi+b\ddot{a}sui$ 「火箸」
 $k\ddot{a}i+\ddot{o}ri$ 「胡瓜」
 - LH^{-1} 型 $itu+t\ddot{u}$ 「五つ」
 (「言葉」「団扇」「刀」「厩」は 3.4 に対応。第 4.7 節参照。)
 - $LHHL^{-1}$ 型 $\ddot{a}sa+p\ddot{i}$ 「朝日」、 $\ddot{a}pa+b\ddot{i}$ 「鮑」、 $w\ddot{a}sa+b\ddot{i}$ 「山葵」、($n\ddot{a}su+b\ddot{i}$ 「茄子」)
 ($p\dot{i}t\dot{e}-p\ddot{i}\ddot{a}$ 「一重」)
- 前者と後者の区別は、伊吹式・讃岐式・真鍋式に観察される 3.5 類の 2 つの下位類、3.5a、3.5b (松森 1997) におよそ対応する。
- この対応が偶然でないのであれば、(40) の音変化は伊吹式・讃岐式・真鍋式を持つ言語の祖先には生じなかったことになり、これらの言語の分岐は後期日琉祖語の時代より前に遡ることになる。

- ただし大門 (2020) の指摘するように、3.5b の「朝日」「鮑」「山葵」は琉球諸語に在証されないか、在証されても対応が不規則であることから、3.5b 類に属する語は日琉祖語に遡らないことが示唆される¹⁵。

4.7 LH⁻¹ 型と琉球祖語の 3.4 類・C 系列

- 3.4 類に属する語の型は L 型と LH⁻¹ 型がある。
 - L 型 *nùp-i+mai 「縫い目」、*tà+mətə 「袂」、*ù+sipo 「潮」、*kə+jəm-i 「暦」、*tani+ma 「谷間」、*tà+muk-ai 「手向>峠」、*à+tama 「頭」、*tər-i+ko 「虜」、*tù+bak-i 「唾」
 - LH⁻¹ 型 *kətə-bă 「言葉」、*kata-nă 「刀」、*uti-pă 「団扇」
(「五つ」は 3.5 類に対応。第 4.8 節参照)
- このうち琉球祖語に再建できる語で L 型の「暇」「縫い目」「袂」「潮」は琉球祖語の B 類に、LH⁻¹ 型の「言葉」「刀」は C 類に属する (五十嵐 2018)。
- また、「言葉」「刀」は大分県の諸言語で 3.4 類ではなく 3.5 類対応である (五十嵐 2018)。
- この対応が偶然でないのであれば、(39) の音変化は九州の一部の言語、琉球祖語には生じなかったことになり、これらの言語の分岐は後期日琉祖語の時代より前に遡ることになる。
- しかし、これはただの 2 語 (「言葉」「刀」) に基づく議論であり、問題の対応が単なる偶然である可能性を十分に考慮する必要がある。

4.8 Tonogenesis の原因となる後期日琉祖語の音変化

- 4 つの音変化がある。
 - 音変化 1, 4 は語末の起伏を回避する働き、音変化 2, 3 は起伏が二回現れることを回避する働きの現れと解釈でき、音韻論的基盤のある音変化といえる。
 - 音変化 1 はその他の変化に先行する。

(39) 音変化 1

語末が *a の時のみ LH⁻¹ 型 (L.∅.LHM) が L 型 (L.∅.LM) に合流

- | | | |
|-----------------|---|----------|
| ➢ *kətə+bă 「言葉」 | > | *kətə+ba |
| ➢ *kata+nă 「刀」 | > | *kàta+na |
| ➢ *uti+pă 「団扇」 | > | *ùti+pa |
| ➢ *uma+jă 「厩」 | > | *ùma+ja |
| ➢ *itu+tű 「五つ」 | = | *itu+tű |

(後部要素の [+A] を [-A] にし、語末の起伏を回避する。)

¹⁵ 中澤 (2020) は 3.5a と 3.5b の区別が改新ではなく古形であるとしている。この区別が日琉祖語の段階まで遡るか否かには言及していないが、すくなくとも近畿、四国の諸言語が分岐する以前にまでは遡るとみている。

(40) 音変化 2

LHHL⁻¹型 (LH.Ø.HLM) が LH⁻¹型 (L.Ø.LHM) に合流

LHHL⁻²型 (LH.Ø.HLM) が LH⁻²型 (L.LH.M) に合流

- *äsa+pî 「朝日」 > *asa+pĩ
- *jä+kâta 「屋形」 > *ja+kâta

(前部要素の[±A]、後部要素の[±H]を削除し、2つの起伏トーンを1つにする。)

(41) 音変化 3

LHLH⁻¹型 (LH.Ø.LHM) が LH型 (LH.Ø.M) に合流

- *pĩtə+tũ 「一つ」 > *pĩtə+tu

(後部要素の[±A, ±H]を削除し、2つの起伏トーンを1つにする。)

(42) 音変化 4

HL⁻¹型 (H.Ø.HLM) が HL⁻²型 (H.HL.M) に合流

LH⁻¹型 (L.Ø.LHM) が LH⁻²型 (L.LH.M) に合流

- *puta+tũ 「二つ」 > *putâ+tu
- *itu+tũ 「五つ」 > *itũ+tu

(語末音節の起伏トーンを次末音節に移し語末の起伏を回避する。)

5. 結論

5.1 要約

- 日琉祖語は4種類の基底声調を持つとする「日琉祖語四声仮説」を提案した。
- 日琉祖語の基底声調はH類、HL類、L類、LH類の4種である。
- 基底声調を構成するトーンは、基底声調と語形成を参照する音韻規則によって、語を構成する一部あるいはすべての形態素の第1音節に連結される。
- 日琉祖語は基底レベルで「位置の対立」を欠く「語声調」言語である。
- 3.2、3.5は、複合形式に適用される音韻規則により派生された表層型に由来する。
- 音韻規則の生産性が消失した時代の体系(後期日琉祖語)において、二次的な表層型に由来する型が、他の型と対立するようになる **tonogenesis** が生じた。
- 最少の声調を仮定する「日琉祖語四声仮説」が再建する日琉祖語の体系は、現代の日琉諸語のアクセント体系の多様性を、最少の音変化で説明することができる。

5.2 展望

- 本研究が提案した枠組みは、それを構成する部分ごとに程度の差こそあれ、修正が必要であるに違いない。
- しかしながら私見では、本研究が提案した以下の3点は、日琉祖語アクセント体系を再建する研究に新たな展開をもたらす可能性がある。
 - 平安時代後期京都語(名義抄式)の1~2音節語に一貫して認められる音調、すなわちH(高)、HL(下降)、L(低)、LH(上昇)の4種を日琉祖語における基底声調と解釈する。
 - 語の最終音節に default のM(中)を再建することによって、1)「下降式」を導入する枠組み(上野 1988, 2006)が説明してきた音変化の説明、2)外輪体系の2.1/3.1と2.2/3.2の合流、内輪・中輪体系の2.2/3.2と2.3/3.4の合流の説明、3)外輪体系、内輪・中輪体系におけるアクセント核の発生の説明を可能とする。
 - 日琉祖語に再建される語の語形成の分析を通じて、複合形式に適用される音韻規則(所謂「複合語アクセント規則」)を再建することによって、後期日琉祖語(日琉祖語が娘言語に分岐する直前の段階の体系)が4を超えるアクセント類を持つに至った過程(tonogenesis)を説明する¹⁶。

謝辞

本研究は、国立国語研究所第4期共同研究プロジェクト「日本語・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究」(五十嵐陽介)、「消滅危機言語の保存研究」(山田真寛)、およびJSPS 科研費 17H02332, 19H00530, 16H01933, 21K00517, 22H00007の助成を受けています。

引用文献

- 秋永一枝、坂本清恵、鈴木豊、上野和昭、佐藤栄作(編)(1997)『日本語アクセント史総合資料索引篇』東京:東京堂出版.
- Celik, Kenan (2022) 「琉球祖語の*weke-の語源とその周辺について」第2回プロトジャポニック研究会. 東京:国立国語研究所.
- 大門知樹(2020)「方言アクセントから再建される日琉祖語の3拍名詞類別語彙」『日本語学会2020年度春季大会予稿集』127-134.

¹⁶ ただし複合形式における形態素境界がアクセント型の分裂につながりうるとする見解は、2.4/5に対応する琉球祖語のB類とC類の区別に関する研究発表(五十嵐 2022a)ですでに公表した。また日琉祖語の複合語アクセント規則を再建することで、アクセント類の発生を説明できる可能性は2020年脱稿の Igarashi (eternally in prep.)で指摘したが、この論文は諸事情によりおそらく出版されることはない。

五十嵐陽介 (2023) 「日琉祖語四声仮説：最少の声調と最少の音変化でアクセント体系の多様性を説明するために」(誤字修正版) 第4回プロトジャポニック研究会, 2023年2月23日, 国立国語研究所.

服部四郎 (1976) 「琉球方言と本土方言」伊波普猷生誕百年記念会 (編) 『沖縄学の黎明—伊波普猷生誕百年記念誌』 沖縄文化協会, 7–55. (服部四郎 (著)・上野善道 (補注) (2018) 『日本祖語の再建』 45–81, 東京: 岩波書店に採録.)

早田輝洋 (1999) 『音調のタイポロジー』 東京: 大修館.

早田輝洋 (2017) 『上代日本語の音韻』 東京: 岩波書店.

平子達也 (2017) 「外輪式アクセントの歴史的位置づけについて」『アジア・アフリカ言語文化研究』 94: 259–276.

平子達也 (2020) 「日本語アクセントの史的探究と比較方法」長田俊樹 (編) 『日本語「起源」論の歴史と展望：日本語の起源はどのように論じられてきたか』 155–175. 東京: 三省堂.

平子達也・五十嵐陽介 (2014) 「大分県杵築市方言の名詞アクセント資料とその歴史的考察」『京都大学言語学研究』 33: 197–228.

五十嵐陽介 (2016) 「アクセント型の対応に基づいて日琉祖語を再建するための語彙リスト「日琉語類別. 語彙」『日本語学会 2016 年度春季大会予稿集』: 233–238.

五十嵐陽介 (2018) 「3拍名詞第4類における本土日本語と琉球語間の1対2のアクセント型の対応について」「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」研究発表会—琉球語のアクセント, 琉球大学.

五十嵐陽介 (2019) 「日琉語類別語彙 (2019年5月17日版)」電子データ (初版については五十嵐 (2016) 参照).

五十嵐陽介 (2021) 「分岐学的手法に基づいた日琉諸語の系統分類の試み」林由華・衣畑智英・木部暢子 (編) 『フィールドと文献から見る日琉諸語の系統と歴史』 17–51. 東京: 開拓社.

五十嵐陽介 (2022a) 「2音節名詞第4/5類に対応する琉球祖語 B類は改新であるとする仮説」日本言語学会ワークショップ, W3-3.

五十嵐陽介 (2022b) 「琉球語・八丈語以外の非中央語系ジャポニック諸語の系統」言語系統樹ワークショップ.

Igarashi, Yosuke (eternally in prep.) “Is it possible to reconstruct compound accent rules in Proto-Japonic?,” submitted on March 14, 2000 as a paper for a special issue of a journal, but the project for that special issue has been aborted and will probably never be resumed.

金田一春彦 (1954) 「東西両アクセントの違いが出来るまで」『文学』 22(8): 63–84. (金田一春彦 (1995) 『増補日本の方言：アクセントの変遷とその実相』 49–81, 東京: 教育出版に採録.)

金田一春彦 (1974) 『国語アクセントの史的探究：原理と方法』 東京: 塙書房.

児玉望 (2020) 「日本語アクセント史の再建をめざして」長田俊樹 (編) 『日本語「起源」論の歴史と展望：日本語の起源はどのように論じられてきたか』 205–225. 東京: 三省堂.

五十嵐陽介 (2023) 「日琉祖語四声仮説：最少の声調と最少の音変化でアクセント体系の多様性を説明するために」(誤字修正版) 第4回プロトジャポニック研究会, 2023年2月23日, 国立国語研究所.

Martin, Samuel (1987) *Japanese Language through Time*. Michigan: Yale University Press.

松森晶子 (1997) 「徳島県脇町・三加茂町のアクセントと本土祖語のアクセント体系」『国語学』189: 68–55.

中澤光平 (2020) 「日琉諸語の下位分類とアクセント研究」シンポジウム「日琉諸方言系統論の展望」国立国語研究所, 12月19日.

Pellard, Thomas (2013) “Ryukyuan perspectives on the proto-Japonic vowel system,” In: Bjarke Frellesvig and Peter Sells (eds.) *Japanese/Korean Linguistics 20*, 81–96, CSLI Publications.

上野善道 (1976) 「奈良田のアクセント素の所属語彙」『文経論叢文学篇』11: 1-32.

上野善道 (1998) 「下降式アクセントの意味するもの」『東京大学言語学論集 88』35–73.

上野善道 (2002) 「アクセント記述の方法」飛田良文・佐藤武義 (編) 『現代日本語講座 3: 発音』163–186. 東京: 明治書院.

上野善道 (2006) 「日本語アクセントの再建」『言語研究』130: 1–42.

Vovin, Alexander (2010) 「上代日本語と古代・中世韓国語の「水」と「涙」」麗澤大学言語研究センター (編) 『日韓言語学会議—韓国語を通じた日韓両国の相互理解と共生—』115–119. 千葉: 麗澤大学言語研究センター.

和田實 (1942) 「近畿アクセントに於ける名詞の複合形態」『音声学会会報』71: 10–13.